

アジア・太平洋研究センター主催シンポジウム

日 時：2012 年 10 月 27 日（土）

場 所：名古屋キャンパス M棟 MB12 教室

テーマ：新世代の日中関係論——日中国交正常化 40 周年に寄せて

報告者：與那覇 潤（愛知県立大学准教授）

家永 真幸（東京医科歯科大学准教授）

福嶋 亮大（文芸評論家）

司 会：宮原 佳昭（南山大学講師）

2012 年は日中国交正常化 40 周年にあたる。南山大学の大学生をはじめとする新世代の人々は、これまでの、そしてこれからの日中関係をどのように考えていくべきであろうか。本シンポジウムは新世代の人々を主たる対象とし、彼らが日中関係を考えるためのヒントを見出すことを目的として開催した。本シンポジウムでは、40 年前にはまだ生まれていなかった 30 歳代の若手研究者三名が日中の政治や文化について基調講演を行い、その後、来場者との質疑応答を交えつつ総合討論を行った。以下、三名の基調講演の要旨を掲載する。なお、総合討論の内容は、NHK「ジレンマ+」のサイトで公開されているため、こちらを参照されたい。

前編：<http://dilemmaplus.nhk-book.co.jp/talk/2122>

後編：<http://dilemmaplus.nhk-book.co.jp/talk/2244>

第 1 報告

民主化へのふたつの道？——「同病相憐れむアジア主義」の構想

與那覇 潤

拙著『中国化する日本』（文藝春秋、2011 年）で、「日本は明治以降、西洋化を推進・達成したと考えられてきたが、実は『中国化』してきたのではないか」という歴史観を提起したところ、読者から「日本が中国と同じになるとは思えない」「また、そうはなりたくない」という声が寄せられることも多い。しかし今日の日本では実際に、西洋型の議会政治・民主主義の機能不全が目立つ状況から、「むしろこれからは、日本の個性を活かした“日本型の民主主義”を作っていくべきだ」という風潮に傾くことは必ずしも珍しくない。

そこで提案されるのは、たとえば「参議院議員は、得票数ではなく人格や識見で選ぶ」といった議論だが、実はこれは明治・大正期に、津田真道や北原龍雄が行った提案と同じである。そのように人格・識見で政治家を選ぶという発想は、中国で実施されてきた「選挙としての科挙」（宮崎市定）と相似形をなすものであり、この意味で私は日本の近代化には「中国化」の側面がある、すなわち日本の民主主義には「中国的な民主主義」の要素が多く入っているものと考えている。

中国は今日も、一党独裁、議会の不在などから、「民主主義が存在しない国」と一般には思われている。しかし民主主義を「民意が政治に反映されること」と捉えるなら、カール・シュミットが唱えたように独裁と民主主義は矛盾しない（独裁と対立するのは「自由主義」である）。だとすれば、現代中国を「民主主義の不在」ではなく「中国的な民主主義」と捉えなおす問題提起には、その体制の当否とは別個に歴史認識としての意義があろう。

我々が普段考えている民主主義、すなわち西洋的な民主主義（議会制民主主義）は「一人一票」を理念とする。すなわち、一般民衆の投票権を平等にして、選ばれた議員が議会で自由な議論をおこなって法律を制定し、この法律を権力者が遵守すること（法治）を正統性の根拠としている。これに対し、宋朝以降の「中国的な民主主義」の理念は「一君万民」、すなわち君主（皇帝）専制のもと、君主が万民の望むところを実現することであった。そして、投票権ではなく官僚となるための科挙の受験資格を平等にし、君主も一般民衆も儒教思想を共有して、君主が儒教の道徳にかなった政治を行うこと（徳治）を正統性の根拠においたのである。現代中国の政治体制は、君主の地位が共産党に、儒教の地位が共産主義に、それぞれ置き換わったにすぎない。換言すれば、民意の担い手を「議会」に期待すると西洋化、「君主」（行政の長）に期待すると中国化、になるだけであり、かような「自由主義なき民主主義」を「中国的な民主主義」と呼ぶことができる。

ここで問題は日本のケースである。江戸時代の日本は藩主（貴族）が残った点では西洋に近く、武士が議会をつくらずに官僚化した点は中国に近い。明治維新以降、幕藩体制を壊し、憲法を制定して議会選挙を実施したのは一見すると「西洋化」ではあるが、近年の日本思想史研究者（原武史・住友陽文）の議論によれば、明治・大正・昭和にかけての政治動向は実は「中国化」、すなわち天皇を中心とする「一君万民」的な政治体制の確立過程であったと見ることもできる。

そう考えれば、日本も中国もいまだ政治面で十分「西洋化」できていないという点では、そう遠くない国同士とも言えよう。まして近年は欧米でも議会制民主主義の限界が指摘され、日本の識者もそれを踏まえて議会制の欠点を補う方法を模索している（東浩紀・谷口功一）。今後、日本の民主主義をどう再生すべきかを考える際、中国のことを他人事として見るのではなく、同じ悩みを抱えた国同士と考える、いわば「同

病相憐れむアジア主義」の視角に立ったほうが、より生産的な思考ができるのではなからうか。

第 2 報告

パンダから見た日中関係 40 年

家永 真幸

本報告では、パンダを通じて 40 年間の日中関係の変化、具体的には日本におけるパンダ人気の凋落という側面にとどまらない、日中関係の構造的変化やパンダをめぐる国際環境の変化を明らかにしたい。

パンダは 1869 年にダヴィド神父によって「発見」され、抗日宣伝のために宋美齡によって 1941 年にアメリカへ初めて贈呈された（「パンダ外交」の起源）ことで、「中国」の動物として認識されるようになったと考えられる。日本では、戦前はパンダにはほぼ無関心であったのに対し、戦後は映画『白蛇伝』（1958 年）や雑誌『アンアン』（1970 年創刊）など自発的に関心を深め、天皇訪欧（1971 年）の頃にはパンダがメジャーな動物として日本社会に認知されていた。日本の動物園へのパンダ誘致は、中華民国と国交のある間は成功しなかったが、「日中共同声明」調印後、ランラン・カンカンが来日して日本で爆発的ブームを巻き起こし、日中友好のシンボルとして認識された。これ以降、パンダの来日は、日中の関係が良好であるか、もしくは悪化した関係が改善されたことを示すバロメーターとなった。

内閣府の世論調査によると、「中国に親しみを感じるか？」という質問に対し、1978 年から 1989 年にかけては親しみを感じる人が多かったが、1989 年以降は半々で推移し、2004 年からは悪化している。一方、上野動物園の入園者数も、1972 年のパンダ来日以降、日中関係が良好な時期は増加しているのに対し、1989 年以降は減少している。ただ、2004 年以降も日中関係が悪化しているのに対し、来場者数はそれほど減少していないことは、新しい現象だと言える。

この間、パンダをめぐる国際環境が変化した。すなわち、パンダ保護のための国際ルールが整備され、1984 年にパンダがワシントン条約「附属書 I」入りして、国際取引が禁止になった。これにより、中国国内ではパンダが「国宝」と呼ばれることになる。これを受けて、新たなパンダ誘致手段として、1994 年に「グリーンディング・ローン方式」（和歌山アドベンチャーワールド）が登場し、いわゆる長期レンタル・パンダの時代へ突入した。

2008 年 4 月のリンリンの死亡によって、上野動物園は 1972 年以来初の「パンダ不在」となった。同年 5 月に胡錦濤が日中平和友好条約 30 周年で訪日した際、新たな

パンダのレンタルを発表したが、2004年以降、政治情勢を受けて日中間の国民感情対立が深刻化していたため、日本のネットやテレビは受け入れに批判的で、石原慎太郎都知事も消極的態度をとった。このように、日本はパンダを歓迎しないムードであったが、結果として2011年2月にリーリー・シンシンが上野に到着すると、日本のネットやテレビはパンダをもてはやし、パンダは日本社会に歓迎されたといえる。

この40年間で何が変わったかと言うと、まず「日中友好」の感情は間違いなく後退した。次に、パンダは「贈呈」ではなく「レンタル」方式になり、ビジネスの要素が強くなった一方で、「種の保存」という国際ルールが重視されるようになった。すなわち、日本と中国の政府が管理する「日中友好」演出の道具であったパンダの立場が、経済的動物とされたり、絶滅危惧種のシンボルになるなど、国際社会のなかでより複雑になったといえる。ただし、「日本と中国の政府間の関係が悪ければパンダは来ない」という点だけは、この40年間で変わっていない。

第3報告

東洋の「復興文化」

福嶋 亮大

第二次世界大戦後の東アジアでは日本人と中国人が相互に交流する機会が制限され、1970～80年代の日本では外交におけるパンダ、サブカルにおける香港、美術におけるシルクロードなどの美化された中国イメージが先行していたが、1990年代以降今日に到るまでのあいだに、そうした甘美なイメージは領土紛争を含む物理的接触のなかであえなく破壊された。だが、暴力的な現実がせり上がる一方、経済的には「アジアの時代」などと言われる時代だからこそ、東洋の文化的価値を再発見し、それをパッケージに仕立て、未来志向的なイメージを再構築することが重要であろう。その一つとして提起したいのが、東洋の「復興文化」である。今回は主として日本の文化に注目する。

もともと日本では、源平合戦後の平家物語、日露戦争後の近代文学、第二次世界大戦後のサブカルチャー（アニメ・漫画）などに代表されるように、大きな戦争や災厄に続く一種の「事後処理」として新しい文学運動が起こる傾向がある。日本の文化にダイナミズムを与えてきたのは、喪失からの「復興」ではないかと考えられる。

例えば、呪歌・讃歌的要素をふんだんに含んだ柿本人麿の長歌は、壬申の乱の「戦後」に絶頂を迎える。国家の混乱に続く「復興期の詩人」としての人麿が、日本文学の詩の進むべき方向性を示したのである。あるいは、源平合戦は一族郎党がほぼ滅亡するという日本では珍しいケースであり、その稀に見る存在論的殲滅＝滅亡体験を受

けて、『平家物語』は一種の鎮魂文学として日本の文学史に刻み込まれた。逆にずっと時代が下った日露「戦後」の近代文学は、ある意味で縮小傾向に振れたケースである。文明開化のプログラムが一段落ついた日露「戦後」の時空においては、文学における陰鬱な「気分」が突出し、社会的・公的な関心につながった市民を描くことができなくなり、社会や国家とは別の領域（不機嫌→狂気）に文学は吸収されていった（夏目漱石『それから』など）。

その一方で、第二次世界大戦後のサブカルチャーは、近代文学とは違う形での「戦後文化」だと考えられる。荒々しい自然を抑圧したディズニーの「衛生的」な記号を導入した手塚治虫は、「戦後」の廃墟に記号のユートピアを建築した。これは、日本的現実（＝自然）を抑圧し、未来の人工世界を仮構しようとする復興思想である。その一方で、宮崎駿はディズニー＝手塚の反自然的世界が追い出した「自然」を再び復興するのであり（「もののけ姫」「崖の上のポニョ」など）、この復興の連鎖こそが日本のサブカルチャーを特徴づけている。

村上春樹は震災後の2011年のカタルーニャ国際賞スピーチにおいて、日本的な「無常」について語ったが、果たして作家としての村上は「無常」を書いてきたのだろうか。もし彼の作品に力があるとすれば、それはむしろ資本主義社会における無数の具体的あるいは抽象的喪失からの「復興」を書いたからではなかろうか。日本的な「無常」のような外国人受けする言説に乗りかかっているのは、東洋文化の真の動力は見えてこない。喪失の後（＝跡）を穴埋めしようとするとき、我々の文明は最も活発に動き始めるのであり、しかも復興期は単なる「復元」に留まらず、むしろ新しいものが侵入してくる活気溢れた時間帯にもなり得る。ここにこそ、我々の文明の力強さとしたたかさ、ダイナミズムを見るべきである。

（文責：宮原 佳昭）